

# SHIBUYA MINI THEATER MAP 2020



## 渋谷 ミニシアター 手帖

## INTRODUCTION

個性的なミニシアター8館が集まり、各国の珠玉の映画と出会える街、渋谷。

そんな特異なエリアは、世界中で此处だけかもしれません。

映画鑑賞の前後に界隈を回遊していただければと、  
各館スタッフお気に入りのスポットをご紹介します。

20代の若手から60代のベテランまで、  
年令性別キャラさまざまな顔ぶれで選んだので、  
昭和感溢れる場所、“今”を感じる場所…

渋谷という街の持つ多種多様な要素が入り混じっています。

その日観た映画の国籍のごはんを食べたり。関連書籍やCDを探したり。

主人公の服装や生活スタイルを古着屋や花屋で採り入れてみたり。

地図を片手に、行き帰りで違う道、いつも通らない路地裏に足を踏み入れて、  
渋谷の魅力を感じていただけると嬉しいです。

※有名なお店が載っていないかったり、完璧な地図ではないかもしれませんが、ご容赦ください。  
地図に載っていない素敵な場所を yourself で発見していただくのもまた、街歩きの醍醐味かなと思います。  
※映画の待ち合わせや余韻に浸るのに便利かなと、昼夜営業のお店を多めに載せています。  
※古着屋さんは幾つか載せましたが、新品の洋服屋さんが良いお店が沢山ありまするので割愛しました。  
※本内容は2019年10月現在のものです。

発行／企画／編集：Bunkamura  
地図制作：杉浦貴美子 (TOKYO LITTLE HOUSE)  
アートディレクション／デザイン：田部井美奈  
イラストレーション：三宅唱人  
印刷：株式会社サンエムカラー

地図PDFダウンロード  
#渋谷ミニシアター手帖

## ミニシアター紹介

### UPLINK 渋谷

[D-3]  
渋谷区宇田川町37-18 トッネビル  
(渋谷駅A2出口より徒歩7分)  
TEL: 03-6825-5503  
3スクリーン(58席／45席／41席)  
<https://www.uplink.co.jp/>

### 「シアター」 イメージフォーラム

[D-6]  
渋谷区渋谷2-10-2  
(渋谷駅東口より徒歩8分)  
TEL: 03-5766-0114  
2スクリーン(64席／100席)  
<http://www.imageforum.co.jp/theatre/>

#### KINOHAUS

[E-3]  
渋谷区円山町1-5  
(渋谷駅A0出口より徒歩5分、  
マークシティ出口から徒歩5分  
神泉駅北口より5分)

### ユーロスペース EUROSPACE

KINOHAUS 3F  
TEL: 03-3461-0211  
2スクリーン(92席／145席)  
<http://www.eurospace.co.jp/>

### シネマヴェーラ渋谷 CINEMAVERA

KINOHAUS 4F  
TEL: 03-3461-7703  
1スクリーン(142席)  
<http://www.cinemavera.com/>

CNNトラベルが選ぶ「世界で最も楽しめる映画館10」にも選ばれた奥渋谷のミニシアター・コンプレックス。1995年、渋谷区神南に原型ともいえるスペース、アップリンク・ファクトリーをオープン。2005年に現在の場所である宇田川町にマイクロ・ミニシアター、アップリンクXもオープン。当時、日本一小さな映画館としてCNNでも紹介された。2006年にアップリンク・ファクトリー、ギャラリー、カフェが宇田川町に移転・集結し、映画上映だけでなく、ライブ・演劇など多目的のスペースとして運営を続ける。スクリーン毎に内装を変えていたり、併設カフェTabelaではスパイスやハーブを使ったフードが楽しみ、自由で親密な雰囲気 に満ちている。代表作は放射性廃棄物の最終処分場を舞台にしたドキュメンタリー「100,000年後の安全」、カナダの俊英グザヴィエ・ドラン監督の『わたしはロランス』、製作から参加したアレハンドロ・ホドロフスキー監督の『エンドレス・ポエトリー』など。メッセージ性の強い社会派ドキュメンタリーから独創性の強いアートフィルムを発信する。近年はメジャー系エンタテインメント作品までをカバールし、1日10作品以上も上映する多様な作品構成を行っている。

2000年のオープン以来、数多くの実験的・先鋭的な作品を上映。その源流は、1977年、個人による映像製作が一般的でなかった当時、自主制作映画の上映や配給の拠点として誕生したイメージフォーラム。国内外の映像作品を上映するシネマテーク活動は現在までの49年間で1000プログラムを超え、映像アートの祭典「イメージフォーラム・フェスティバル」の運営や、「イメージフォーラム映像研究所」における映像作家の育成も行っている。1980年には出版部門として株式会社ダグレオ出版を創立。映像に関する書籍やビデオソフトの制作・販売が始まり、2000年にはシアター・イメージフォーラムを開館し、映画館の運営がスタートした。37週間連続上映、3万人以上の動員を記録した2007年のニコラウス・ゲイハルター監督『いのちの食べかた』や、2019年公開のドキュメンタリー映画『主戦場』の大ヒットが話題となった。旧作特集にも積極的に取組み、2019年12月にはアニメス・ヴラルダの遺作や長編デビュー作を特集上映。鑑賞、制作、上映、配給、批評、交流。全ての活動がリンクした映像アートの発信地として活動を続けている。

「ユーロスペース」「シネマヴェーラ渋谷」という2つの映画館と、多目的ホール「ユーロライブ」、トークライブハウス「LOFT9」、映画美学学校からなる、アート系シネマコンプレックス。ユーロライブでは主に落語やコントの定期公演や映画の上映会、カフェも併設するLOFT9では連日のように多種多様なテーマのトークライブが行われている。

1982年5月に渋谷区桜丘町にオープンし、ミニシアターブームを牽引した草分け的存在のひとつ。講演会やコンサートなども催す多目的のホールとして運営していたが、1985年6月、『ビデオドローム』の上映を機に常設映画館となる。開館当初から国籍やジャンルを限定せず、その時々の流れを汲んだ作品選定により映画ファンの関心をひいていたが、1987年の『ゆきゆきて、神軍』は社会現象的なヒットとなり動員記録も樹立した。また、グイム・ヴェンダース、アッバス・キアロスタミ、フランソワ・オゾン、レオス・カラックスなどユーロスペースが自社買付により初めて日本で紹介した映画監督も数多い。2006年1月に設備の拡充のため円山町に移転。現在の編成は従来の路線に加えて日本を含む各国の新人監督の作品、芸術や社会的テーマのドキュメンタリー、各種映画祭および特集上映などを柱にしている。また日本のインディーズ作品にも取り組み多くの若手監督を輩出している。

若い世代に様々な映画を観てもらおうという目的のもと、2006年にオープンした名画座。一般的な名画座と異なり、日本のみならずアメリカ、ヨーロッパ、アジアなど様々な国の作品、またサイレントから近作まで幅広い作品を取り上げている。フィルム上映を続けている数少ない映画館のひとつでもある。2〜4週ごとに特集を企画し、日米欧米の監督、俳優、脚本家、プロデューサーなどの特集に加え、映画関連書籍の刊行記念特集、フィルムノワール、メロドラマなどテーマ別の特集も実施。トークショーにも注力し、山本富士子さん、有馬稲子さん、香川京子さん、司葉子さん、加賀まりさん、梅宮辰夫さんなど、多くのゲストから日本映画黄金期の貴重なお話を伺っている。2019年春にはソヴィエト映画特集とキム・ギヨン監督生涯100年記念特集を開催。

#### ヒューマントラストシネマ渋谷

[D-5]  
渋谷区渋谷 1-23-16 ココチビル 7-8F  
(渋谷駅B1出口正面すぐ)  
TEL: 03-5468-5551  
3スクリーン(200席／173席／60席)  
[https://tcg.jp/human\\_shibuya/](https://tcg.jp/human_shibuya/)

### CINE QUINTO

シネクイント [D-4]  
渋谷区宇田川町20-11 渋谷三葉ビル7F  
(渋谷駅ハチ公口より徒歩3分)  
TEL: 03-3477-5905  
2スクリーン(162席／115席)

### WHITE CINE QUINTO

ホワイト シネクイント [D-4]  
渋谷区宇田川町15-1 渋谷パルコ 8F  
(渋谷駅ハチ公口より徒歩7分)  
TEL: 03-6712-7225  
1スクリーン(108席)

<https://www.cinequinto.com>

## Bunkamura LE CINÉMA

[D-3]  
渋谷区道玄坂2-24-1 6F  
(渋谷駅A2出口より徒歩5分、  
神泉駅北口より徒歩7分)  
TEL: 03-3477-9264  
2スクリーン(150席／126席)  
<https://www.bunkamura.co.jp/>

## MEMO

シネセゾン渋谷の意思を引き継ぎ、2009年より東京テアトル株式会社が運営。“自分の好みが見つかる映画館”をコンセプトに、大作・ミニシアター系を問わず多彩なラインナップが充実。また、コンセクションもこだわりのフードメニューを取り揃えている。なかでも劇場スタッフが趣向を凝らして考案する公開作品をイメージしたオリジナルドリンクが人気。日本での公開が見送られた作品をお客様にスクリーンで観てほしい!という編成担当と劇場の熱い想いから実現した特集上映「未体験ゾーン」の映画たち」も2020年で9年目を迎え、映画ファンの中では年始の風物詩として認知拡大中。その他にも様々なテーマの特集上映やイベントを開催している。東京テアトル株式会社創立70周年を迎えた2016年より、世界で賞賛を浴びる名だたる監督による作品や世界で絶賛されたマスターピースといえる作品を「マスターセレクション」として認定、年間を通じて上映中。近年のヒット作品は、史上最も恐ろしい舞台として名高い同名の大ヒット劇を映画化した『ゴースト・ストーリーズ 英国幽霊奇談』、井浦新と成田凌が競演した『ニワトリ★スター』など。

1981年に渋谷PARCOパート3内にオープンした多目的ホール「スペーススパート3」を前身に、1999年7月に常設映画館としてスタート。封切作品の「バッファロー'66」は、34週の大ヒットロングランとなり、ミニシアター歴代観客動員数2位を記録した。以降、クリストファー・ノーラン監督の「メメント」や、「告白」の中島哲也監督の「下妻物語」など、現在も最前線で活躍を続ける監督の初期代表作を数多く上映。“世界中の喜怒哀楽（エンタテインメント）をお届けします”をコンセプトに、ジャンルを問わず国内外の個性的で良質な娯楽作品を提供し続けている。2016年8月に渋谷PARCO建替えの為、ジョン・カーニー監督の「シング・ストリート 未来へのうた」を最後に一時休館となるも、2018年7月に渋谷ロフトの向かいに場所も新たに復活。渋谷地区で唯一となるベアシートを導入するなど、人と楽しさを共有できる映画館として、“リアルな感動・発見のあるライブエンタテインメントの提供”に取り組んでいる。2019年11月22日にグランドオープンした「新生」渋谷PARCO内には新たにWHITE CINE QUINTOが開館。記念すべきオープニング作品は、世界的に著名な前衛芸術家・草間彌生の半生を追ったドキュメンタリー映画『草間彌生∞INFINITY』。ジャンルを問わない個性的で良質な作品を上映するほか、映画以外の映像作品も積極的に上映していく。

1989年オープン。館名が仏語だったこと、建物の設計が私人建築家だったことから、当初はフランス映画を中心に欧州の芸術的な映画作品を上映。館内には芸術家や作家に愛されたバリの老舗カフェ「ドゥ マゴ」の姉妹店もある。最初の大ヒットは、開館年10月に封切られるや延べ41週のロングランとなった『カミュー・クロードル』。以降、女性の共感と呼ぶ映画作品の選定に定評がある。さらに5年目に初のアジア映画『さらば、わが愛 覇王別姫』を上映し好評を得、それを機にアジアや北米作品にも守備範囲を広げた。他とは異なるル・シネマの個性は、2つの舞台芸術ホールと美術館を擁する日本初の大規模複合文化施設「Bunkamura」の中にある点。そのため、舞踊・音楽・美術・服飾・文学といった他ジャンルの芸術にまつわる伝記映画やドキュメンタリー、ODSで強みを発揮している。近年の代表作は『ティオールと私』『君の名前で僕を呼んで』『幸福なラザロ』『いつだってやめられる』シリーズや、『イタリヤは〜』に続く『スペインは呼んでいる』などコメディも開拓中。2019年12月〜2020年1月は『バリの恋人たち』『冬時間のバリ』『私の知らないわたしの素顔』『男と女 人生最良の日々』と王道のフランス映画が並び、原点回帰。2020年は数多くのカンヌ話題作が揃い踏み。

## 渋谷・映画・私

### 小泉今日子

渋谷…映画…私…。ゆつくりと3回頭の中で唱えてみた。遠い過去から女の声が聞こえてくる。「私はあなたを待っている。聞こえてる?」女は歌っているようだ。砂漠のように荒廃した田舎町の国道沿いの夕暮れ。誰かが投げたブーメランがまるで鷹が羽を広げて飛ぶように優雅に空に円を描く。女の声がオレンジ色の夕暮れに染み渡っていく。「I am calling you. Can't you hear me?」。

1989年、バーシー・アドロン監督『バグダッド・カフェ』。渋谷のシネマライズ。バルコとバルコの間の路地の突き当たりにあったこの映画館は残念なことに2016年に閉館されている。23歳だった私は、ある朝パチッと機械のスイッチを入れたみたいに目を覚ました。窓からは優しい午前の陽光が部屋に注がれ、身にも心にも一切の問題なく。なんて晴れやかな目覚めだろうと、もしかしたら生まれて初めて感じた朝だったかもしれない。こんな時、人は何をやるのだろうか。散歩でもするのだろうか。ふと、その辺に転がっていたブレイガイド誌をバラバラとめくってみた。そうか映画を観るという手があったのか。今からなら1回目の上映時間に歩いて行ったらって間に合う。当時住んでいたのが渋谷からほど近い住宅街だったので、行き先は渋谷と決め、観た

小泉今日子 Kyoko Koizumi

1966年生まれ、神奈川県厚木市出身。1982年歌手としてデビュー。同時に映画やテレビドラマなどで女優業も開始。エッセイや書評など執筆家としても活動している。2015年には自らが代表を務める「株式会社明後日」を設立。プロデューサーとして舞台演劇や音楽イベントなどの企画、制作に従事。また、映像制作プロダクション「新世界合同会社」のメンバーとして2020年秋に公開予定の外山文治監督『ソワレ』にアソシエイトプロデューサーとして参加している。

## 渋谷・映画・僕

### ミヤギフトシ

6年前田園都市沿線の町に引っ越してから、私にとって渋谷は身近な街になった。しばらくして、仕事場であるユトレヒトも渋谷に移転した。休みの日も含めて、ほぼ毎日のように渋谷にいるような気さえする。自然と映画を観るのも渋谷が多くなる。映画の余韻に浸るため、あるいは受けた衝撃を鎮めるため、映画館を出た後私は大抵ひとりでお酒を飲む。場所はほぼ決まっていた、ヒューマントラストシネマ渋谷だったら道路を挟んだフロント、シネクイントだったらロフト隣のフロント(私はフロント飲みが大好きだ)、ユーロスペースやBunkamuraル・シネマだと、文化村通りのセガフレード・ザネッティ…は残念ながら閉店してしまった。アップリンクの後は美味しいワインが飲めるサジヤ、あるいは少々賑やかだけど丸木屋商店でもいかもしれない。イメージフォーラムの近くにも魅力的でひとりでも入れそうな串焼き屋さんを最近発見した。そうして私は、お酒を片手にiPhoneでレビューやネタバレ考察を読み漁り、twitterにとりよめのない感想を書き込んだりしていた。閉館してしまったシネマライズの後はどこに

ミヤギフトシ Futoshi Miyagi

美術作家。1981年生まれ、沖縄出身。渋谷の美術系書店ユトレヒトに勤務しながら活動続ける。自身の記憶や体験に向き合いながら、国籍や人種、アイデンティティといった主題について、映像、オブジェ、写真、テキストなど、多様な形態で作品を発表。2019年、初の小説集『ディスタント』(河出書房新社)を刊行。アーティストランスペースXYZ collectiveの共同ディレクターをつとめる。近年の主展覧会に、「話しているのは誰? 現代美術に潜む文学」(国立新美術館、2019年)、「小さいながらもたしかなこと」(東京都写真美術館、2018年)、「How Many Nights」(ギャラリー小柳、2017年)などがある。

い映画を探した。それが『バグダッド・カフェ』との出会いだっった。荒れ果てた田舎町でカフェとモーテルを営む黒人家族。心が荒んで笑顔なく日々を過ごす人々の中にドイツ人の中年女性がやって来て、彼女の影響で人々は笑顔を取り戻す。端的に言うとそんなストーリー。もちろんもっと深い映画なのだけれど。モーテルに住んでいる影物師の女性がある日突然モーテルから出て行くことになる。どうして? と尋ねられると「Too much harmony」と答える。調和が取れ過ぎている。私は何故かこの言葉に衝撃を受けた。求めていた言葉が降ってきたという感じだった。環境に適應する能力というのはとっても大事なことだけれど、その中で変化を求めたり、小さなことに疑問を感じることを忘れてしまつたら生きている意味がわからなくなるような気がして、その頃の私はどこにいても居心地が悪いと感じていた。ずっとモヤモヤしていた。もっと自由に孤独を恐れず蠅と風に吹かれていたんだ。「Too much harmony」この言葉に私は解放されたのだった。そこから先の私の人生は見ての通り。間違っているのか正しいのかは人生が終わる刻に考えればいいと思っている。BGM :「Calling You」Jevetta Steele

